

伊庭想太郎編(6)

星亨刺殺事件

白昼、東京市役所内で

凄惨な現場、社会に衝撃

その凄惨な事件が起きたのは今から約110年前、明治34年(1901)6月21日午後3時半過ぎのことである。

読売新聞(翌22日付)は、「星亨氏暗殺せらる」の見出しで報じた。「昨日、東京市参事会議事室に於いて、星亨氏が突然刺客伊庭想太郎なるものに刺殺せられ、遂にそのまま現場に絶命するに至れる」と書き出し、2面のすべてを使って詳報している。

東京朝日新聞(同)は惨劇の様子について、「彼(伊庭)は突然星氏の背後に廻ると見る間に、予ねて隠し置きたる短刀を取り出し氏の右肋骨より肺を貫きて刺し徹し、尚数刀を加えたれば…」と伝えている。3面のほぼ全部を関連記事で埋め尽くし、当時の新聞としては破格の扱いと言っていい。

東京市長や助役、参事会員らの目の前で、しかも白昼、政界の大立者で政友会総務の要職にある星亨が刺殺された。星は、「オシトオル」の異名でその豪腕ぶりは広く知られ、東京市にも勢力を拡大、市参事会員や市議会議長などを歴任した。

一方、その場で縛に付いた想太郎もまた当時、四谷区会議員の公職にあり、教育者、実業家として名望を得ていた。

事件が社会に与えた衝撃は大きかった。朝日、読売両紙の記事とともに現場の見取り図付き、朝日は星と伊庭の肖像画も掲げた。他の多くの新聞も一斉に、かつ大々的に報じたのは当然だろう。

殺伐たる世相、混沌たる政界

事件の真相を探る前に、明治の時代背景に触れたい。

維新後の政治は、薩長主体の藩閥政治と自由民権運動とのせめぎあいを軸に展開した。そこに、



星亨(左)と想太郎の肖像画(右)。下は現場見取り図=いずれも東京朝日新聞掲載



藩閥から疎外された旧幕臣やいわゆる不平士族の憤まんがからんでいたことは言うまでもない。

明治18年内閣制度が制定され、第1次伊藤博文内閣が発足する。薩長中心の閣僚の中で、旧幕臣からただひとり、榎本武揚が初代逓信相に就いたのは、このときである。

さらに大日本帝国憲法発布、総選挙、国会開設と続いて、政治の仕組みは整えられていくが、なお国家建設の諸懸案をかかえて、確執の火種は絶えなかった。政治活動や言論に対する弾圧は強硬だった。各地で騒乱事件も頻発した。

この間、要人襲撃・暗殺事件も相次いでいる。明治11年大久保利通暗殺、同16年板垣退助襲撃、同22年森有礼暗殺、同22年大隈重信襲撃…。そして、同24年には天津事件が起きた。訪日中のロシア皇太子が警備の巡查に斬りつけられたこの事件は、政府を震い上がらせた。

こうした殺伐たる世相、混沌たる政界にあって、星亨刺殺事件は起きた。